

2013. 8. 31

現代俳句千葉

110号

巻頭エッセイ

私の第三章

幹事 小林俊子



昭和五十八年、千葉県の北の果て、野田市に移住。

—— 子犬との出会い ——

夏の夕暮れ、ダンボール箱に生後間もない子犬六匹が捨てられていました。トレーニングを終えた次男はか細い鳴き声に一匹だけでも助けたいと、抱いて来たのです。さあ大変です。犬用の哺乳瓶、ミルクから揃え、三時間毎の授乳が始まりました。人間の赤ん坊と同じです。ある日寝不足の私の目に、異変が起きました。痒くて痒くてたまらなくなり、眼科へ行きました。医師から何か心境の変化でも、と聞かれたので、子犬の経緯を話しました。「それは犬アレルギーだよ、育てるのは無理だね。親犬の心音の代わりに時計をタオルでくるんで側に置いてごらん。」早速その通りにしますと、その上ですやすや眠るのです。それを見て胸が熱くなりました。名は「ポポちゃん」、シエパードとコリーの雑種犬、女の子です。日に日に大きくなり、黒毛から、グレー、そして茶色のふさふさに変身です。甘えん坊で臆病で人間が大好きでした。最期乳がんになり手術の甲斐もなく、十四年の命を閉じました。骨は庭に埋めました。小さな命が家族を充分楽しませてくれました。ポポの成長はアルバム三冊に収まり我が家の宝物です。

—— 俳句との出会い ——

公民館の文学講座が始まりました。講師は河合凱夫先生。名所旧跡などの文学散歩を重ねながら自然と俳句の手ほどきを学んでいたのです。昭和六十二年凱夫主宰の軸へ入会しました。今もその当時のお仲間と共に軸で楽しく俳句を詠んでいます。

—— 母との同居 ——

丁度介護制度が始まった年でもありました。ここでも色々な方達との出会い、そして家族の協力もあり泣いたり笑ったりと楽しい母との生活は掛け替えのない七年間でした。

—— 人形劇との出会い ——

平成十四年度さわやか千葉県民プラザにて人形劇ワークショップに参加。その後有志が集まり劇団として活動したのです。生身の人間ではなく象徴的に造形されたオブジェ（物体、人形）を表現素材としての舞台に魅力を感じつつ、丸七年。体力があればもう少し続けたい分野でした。

—— 最後に私の日課の一つに鏡の中の自分との会話 ——

先ずおはようさんと笑顔で声を出し、顔の体操をします。時には一日しゃべらない時などは、意識して音読をしています。これからもちよつと立ち止まりながら自然体で、年齢にはかかわりなく命を閉じる時まで自分の足で歩いて行きたいと願っています。俳句にも言葉の歩幅があると教わりました。私の人生の節目の時、残された時間の過ごし方などなど、考える事が多くなりました。

目次

私の第三章	小林俊子	1
諸家近詠		2~4
私の感銘句		5~7
図書紹介・ひろば		
ミ二吟行会（木下、川めぐり）		8
津田沼、青葉、柏 研究句会報告		9
会員・会友の近況		10
掲示板		10

諸家近歌

加藤昌一郎

佳きものを見るたびホーホケキヨと思ふ
打てば響くところを扱ひ落椿
照星の中はいづこも桜かな
立葵に返り点あり風纏ひ
踏青や人間だけが音を立て

香取 哲郎

陽炎やかの世へ渡る橋の上
わが齡乗せて急げり花筏
雲雀追い吾も昇天の鍬使う
更衣湖一枚をふところに
黄泉平坂春月を背に負いて

加倉井允子

ロボットの悲しき手足啄木忌
白椿明日を思えば落ちきれず
介護者の指は水中花の湿り
蝌蚪に足ラストダンスの靴がない
今日あるは今日のため母子草

小野 裕文

雨の日のやることリストかたつむり
棒のごと乾くぞうきん夏日向
プールにもリングにもなる夏座敷
うさぎにはなれない亀だ昼寝する
どこまでもよじのぼる意志蟬の殻

小高 稔

視界から食み出すブルー昭和の日
笑い待つ仮面の時間四月馬鹿
しゃぼん玉時空を超えてむむむ無
轍から一寸に咲く犬ぶぐり
亀鳴いて古墳の主の物語

小高 和子

友見舞うひとときの春惜みけり
植木市強気に植切る漢居り
寺町と言う昔遊び場竹落葉
石白の果ては飛び石蟻のみち
水辺にて石飛ばす児等夏は来ぬ

神山 宏

永き日の荷台に舟のスクラップ
ちゅうりつぶ整形外科を囲みけり
囀りや縁側にある台秤
子かまきり何度も草を滑り落ち
絡む枝探る蔓ども夏休み

片山 依子

追ひかける夢はまだある葱坊主
浅草の日暮は早し招き猫
風船かづら豆腐屋の朝の音
午後四時の純愛ドラマ糸玉
愚痴多きをとこに夜のシクラメン

川井 吉二

花の雨鉄の門扉の黒光り
蝶乱舞少女の脚のもつれなく
さくらしべ地球へ音を敷きつめる
春愁や生簀の底に動く闇
茎立や安房の山なみ低姿勢

岡山 敦子

陽の光広く集めて春障子
ポケットに春風も入れ一年生
武蔵野の大地のひびき春嵐
柿若葉はげしき雨に立ち向ふ
小さき鉢トリコロールの花選ぶ

小川トシ子

土に還ることも八月の花火
菩提樹の胸のあたりのみんみんや
源流のまだ軟らかき花芒
青い紫蘇の実あちらから声のして
どつと来てどかりと在す十二月

尾形ゆきお

二月果つシャキシヤキと鉄の音
画狂老人卒倒以後は死を描く
桜公園花神は初老でブルゾンで
首薙ぎこちなく遠投の親子
金沢の女に刺青著莪咲けり

岡田 淑子

春野菜しゃべり出したら止まらない
じゃがいもに芽が出てひどい肩こり
押入れに首をつつ込み春愁い
初蝶や被災地と云う現住所
期限切れのソー스瓶ある西東忌

國分 三徳

SLが好きで総立ちつくしんぼ
万緑のコンセントから充電す
カメレオンのどこから秋になるのかな
お前さんもおひとりさまか木守柿
あみだ籤辿りついたる十二月

木下 昌子

賑やかにすり切れメーデーの尻尾
飲食を分けあふひととるて涼し
凌霄や午後は人魚となりさうな
雪溪や一步は楽し一步に音
夏の果遣せぬものを積みあげて

諸家近歌

清和の天耐えて町並保存街

万葉の色の一つを花萱草

夏の園麗人に道譲りけり

戊辰役の横死碑小さき梅雨岬

多芸とは無芸に似たり晩夏光

佐藤 信顯

独り言つ事の夕きや夏の入り

蜂の子の四ひらに遊ぶ昼静寂

夏旺ん耳奥さわがす蟬の声

初夏の日向の匂い鳥の影

噴水は女神の像のオマージュと

小出貴似子

とちがら 輩も白き花こぶし

春眠の深きへ落す卵かな

おぼろ夜の胡乱な箱を家という

あざやかに入りし死角の夏の蝶

放蕩の果てにありけり豆の花

小高 桂子

対岸をいつも気にしている晩夏

捨てるには惜しきドンダリ人が好き

十月のひかりと影のほか置かず

また羽音晩秋の沖滑らかに

饒舌な指があるだけ日向ほこ

黒澤 雅代

ころがりて止まる鉛筆鳥の恋

芝桜おんな同志という疲れ

六月の扉の奥に扉あり

晩年に余力ありけり桐の花

凍蝶の上手に力抜いている

佐々木幸子

言語野の測深鉛か花辛夷

後鳥羽院眉間に蛩隠しおり

河鹿きく身体の水をかたむけて

蝶の翅片付けてから考える

豹紋蝶放つメンタルクリニック

坂間 恒子

蛇現れて少年青白く去れり

水割りの中のシャンソン夏の雲

夏潮がべたべたとくる寝入りばな

逆撫でて剃るはつなつのどぼとけ

円陣をすぐ組む秋の噴水は

倉岡 けい

紅梅の雨滴のきらら朝日射す

柿若葉微笑み返す抱きし嬰

夏館腕に医療のバーコード

夜叉面のふと微笑むや秋ともし

枯葉踏む齡の嵩をふかぶかと

佐々木 禎

百年後とは冬霧にたどり着く

だから火の中水のなか蝶一頭

ライトブルーの涙だった四月馬鹿

ろくがつの腕どこに置いても老化よ

一病に真つ赤なくすりああ柘榴

菊地 京子

梅咲いてあの世もこんなとこかしら

緑陰のこわれた椅子にわたくしが

後期高齢ぼとりと蟬がおちました

こわれそうな私のからだセロテープ

冬青空裂け目つくろう糸がない

小林 雪枝

水仙を活けて煩惱研ぎ澄ます

割烹着眩しき真砂女の紫木蓮

円滑に総会終り梅真白

どこへでも行ける身軽さ夏落葉

まだ乳房持たぬ少女や蓮膨らむ

斉藤すず子

稲の花一粒の雨くちびるに

色鳥や還暦祝いの同窓会

夏木立見上げし百段登りきり

夕立を見込んで植えし花の苗

母の日や明るい色の宅配便

佐藤美紀江

国難に生まれあはせて蟬の穴

桃のかたちにフクシマの桃あらふ

原発の風くる村に芋を干す

那珂川の流れが迅し芋煮会

らふ梅の咲くときは咲く蕊たてて

川又 優

天空の屏風となりし山の藤

亡き人の夢思う朝柿若葉

夏校舎見れば彼方のゼミの部屋

濃紺のしじま染めたる杜若

若竹やのびのび進む新世界

齋藤 溥子

解水音カリンと首のさびしさに

春の月頬白鮫と打ち解ける

うまそうなつらそうな雨の藤房

桃の花咲いて手のひらどきどきす

象老いてひねもす春の渚のよう

久野 康子

諸家近歌

佐久間眞城

特上の天井八月十五日
遠目にも眉目秀麗山笑う
安房上総少し早目に山滴る
山粧う色即是空衣食住
眠られぬ山もあろうよ山眠る

川嶋 悦子

銀座晩秋みな長き脚をして
冬休み百葉箱とうさぎ小屋
陽炎の中原子灯の大き影
ちちははの墓がふるさと燕来る
関ヶ原雪寄りそつて家二軒

北野 耕兵

小櫃川潺々として夕河鹿
夕焼けにあまたの孤独むらがりし
集落のそれぞれに時鳥
久留里みち青田を守る道祖神
起伏好き二両連結走り梅雨

北村 妍二

すててこや短気損気は親譲り
禿頭白髪どちらが長寿万愚節
踏むなたんぼば黄はキリストの杖の跡
グルコサミン・コンドロイチン我れ麦酒
うすものや改憲論議ちくちくす

佐藤由里枝

おおかたは海へ出てゆき青蛙
雨に咲き雨にこぼるる大でまり
生国の岸から遠く夏の川
半島にあまたの仏像青葉騒
まん中に猫の退屈夏野原

原 悦子

母の日や口下手な子の宅配便
良妻の殻脱ぎ夏を軽くする
ひろしま忌黙禱乙女のつけまつげ
少年のはにかむ会釈今朝の秋
なめこ汁とろりとろりと母の愚痴

小出 治重

たましひを置き去りにして五体消ゆ
雨欲しや蟻一匹が立ち止る
三難を抱へて永し夏ひと日
人生の夏去り歩む夏の道
空梅雨へ五臓の怒り噴出す

楠見 恵子

バナナの皮剥きながら鏡見る
水中花プラスチックの唇に
ゆふぐれについていくなり恋の猫
居るはずのない人がゐる春深し
うららかや死後の携帯電話鳴る

小池美佐子

夏椿散つて空との距離がある
炎昼の高層はるか海遙か
老鶯の錆びた碇を手放さず
人生を引つ括めての夾竹桃
ひたすらの納涼ベンチ疑似家族

楠井 収

小康の母の手髪に花芙蓉
家それは匂いあるもの浅蜷汁
万愚節拙句というはみな好句
瞑りても夢にとどかず金魚玉
忘却とは余程の前進蛇の衣

窪田 俊作

長い休日八月の土性骨
緑蔭のベンチ大きく口開く
馬の面西を向いて終戦日
音信は未来の形水中花
孵化せし蟬に一木の水の音

近藤 幸子

畔行きし人や案山子に変わりたる
朝顔の明日は開かぬ花しほむ
ビルの角曲りて出会う秋の風
照り葉たちもつとゆっくり燃えなさい
オーバーのポケットにある未解決

佐藤 鈴子

夭折のひかり手の内青蚩
葬送のわたしのアリア蓮見舟
初空蟬産後の背中やはらかい
蝉時雨ナウマン象の母郷かな
香水や書架のマ行を過ぎてより

希田沙知子

画用紙の端からこぼる葦の青
鬱すべて吐いてしまった濃あじさい
あじさいの咲き継ぐかたち父と母
仏像の頬の鬚りや白紫陽花
紫陽花に藍の深まる午後三時

小林 俊子

山桜ふわつと雲に乗りかえる
春暁の畝から息のふきあがる
消灯のそれからの耳春おぼろ
受け入れる袋に記名花曇り
雲雀野の指標は天におきかえる

私の感銘句

村上千代美

作者名 号頁

灯の届くかぎりが大地蕪汁 塩野谷 仁 104 2
 ひらがなに浮力のありてかげろへり 下村 洋子 104 3
 さよならを二度も言わせて細雪 木之下みゆき 104 4
 拾った椿が泪ためていた 直江 裕子 105 8
 頭の何処かが桜歴史をかたる 原島 典子 105 9
 少年に牡丹のくわしい話など 鳴戸 奈菜 106 4
 春愁を測り切れない鯨尺 中村 冬美 106 4
 苺ジャム煮て家中をパンにする 保坂ミエ子 107 5
 ももさくら炎のごときもの海へ 山崎 聰 107 6
 はつとふたりどきつと茸飯の夜 山中 葛子 107 6
 春愁を測り切れない鯨尺 中村 冬美 107 6
 鯨尺は主に布を計る時に使う物差し。作者の前に置かれていた反物は、きつと懐かしい布であり手繰り寄せる思いは、やがて深い愁いに。布に寄せる女心、豊かな情感が伝わってまいります。まさに女性だけが言える、測り切れない春愁ではないでしょうか。

池田 幸

日暮また人泣きにくる大冬木 塩野谷 仁 104 2
 草の実や呆けるな転ぶ言われても 高橋富久江 104 3
 身を移すに六文の銭秋の風 高桑婦美子 104 3
 冷奴なかな丸くなれなくて 細野 一敏 106 2
 草笛の音風を踏み外し 保坂 末子 106 2
 今年竹この世の端が見えますか 増田 斗志 106 3
 大仰に笑ひ転げて止まる独楽 やち 坊主 106 3
 花水木淡き色なり過去の色 三須 民恵 107 4
 自由席へどうぞ余生の花筵 保坂ミエ子 107 5
 ややあおうちどんぐりの山芽吹く 村田 珠子 107 5

竹内 絵視

遠流のご舟にからまる魂や藻や 武田 伸一 104 2
 捨てにきてさくら紅葉があたたい 芝崎 梓 104 2
 翔きが春光となる舟祝い 庄司とほる 104 2
 嬰泣ける声たくましき冬木の芽 高橋由紀子 104 3
 初神楽天岩戸を開けにけり 杉江 和子 104 4
 地震幾度山笑うこと哭くことく またひとり霧を脱ぎつつ近づきぬ 中島玄一郎 105 9
 蔓珠沙華炎えつるまで緋を保つ 藤岡 尚子 106 2
 まぼろしのロシア革命ベチカ燃ゆ 千野湘山人 106 4
 風鈴の南部の民話聞くここに 八重樫弘志 107 5
 宮川登美子 107 5
 遠流のご舟にからまる魂や藻や 武田 伸一 107 5
 舟にからまる藻はあたかも人々の魂のしがらみの如く離れ難く、その舟での生活の歴史がまわりついているその魂の歴史の如くからまる同じ源を持った、一步離れた先祖達の遠流の存在とも呼応している。それは同じ曲奏でもあり、先祖達の遠流は現在形のこの舟への伴奏として奏でつづけ共に合奏しているのである。

國分 三徳

立春やまた空つばのランドセル 高橋由紀子 104 3
 庭中の水仙を摘み誕生日 西宮はるゑ 105 8
 複雑なものの上に蛸蚪の紐 西澤 照雄 105 8
 転倒に理屈のなくて春の坂 浪本 恵子 105 9
 おしやべりは不得意科目かき水 藤井 遥 106 3
 踏んばつていてあめんぼの軽やかな 廣谷 幸子 107 4
 扇風機横向くときは退屈で 福田 柁子 107 4
 苺ジャム煮て家中をパンにする 保坂ミエ子 107 5
 どくだみや紐切れそうな靴洗う 山本 敦子 107 6
 悪妻に時効などなしけむり茸 山中 葛子 107 6

悪妻に時効などなしけむり茸 山中 葛子

「悪妻に時効なし」 たった七文字でこれ程に悪妻の本質を言い当てた言葉は今まで見たことがない。
 時効というのは、悪妻はある期間たてば良妻になるというものではないともとれるし、悪妻の罪は永久に赦されるものではないともとれる。しかしこの句はそんな詮索はしないで、痛烈であり愉快であるという捉え方でよいと思う。まさに言い得て妙である。

小林 実

ひらがなに浮力のありてかげろへり 下村 洋子 104 3
 父と子に武器となる黙菲雜炊 高野 礼子 104 4
 父の木がいつぼん生えている海市 直江 裕子 105 8
 地の塩のごとありがたき蠅をうつ 檜垣 梧樓 105 8
 轉りの椅子が混み合う神経科 原島 典子 105 9
 夏が来て人の形の水ガラス 白木 暢子 105 9
 萍の持病は水平思考かな 実昶 繁 106 2
 甚平を脱いで喪服の重さかな やち 坊主 106 3
 水平線も君も潔癖花菜畑 森 美樹 106 3
 本籍は大字花野一番地 中村 冬美 106 4
 地の塩のごとありがたき蠅をうつ 檜垣 梧樓 106 4
 地に塩なくば生きられず、蠅と云えども物質循環の一員、感銘致しました。

小池美佐子

さよならを二度も言わせて細雪 木之下みゆき 104 4
 垂れ桜こつこつさせてモニュメント 原島 典子 105 9
 大花野くたびれし足雲に乗せ 西河しん平 105 9
 触れないで怒りでいっばい鳳仙花 半田 千枝 105 9
 仮面外せば狸顔なり晩夏光 柳本 ゆみ 106 2

白酒に酔うて旅立つ鉤眉 三好美穂子 106 3
 梅雨こもり鼠をおもう土竜かな 鳴戸 奈菜 106 4
 顛末の突きあたりたる十三夜 村上千代美 107 4
 かきつばた女米寿の初個展 松下總一郎 107 5
 未来少々藤のむらさき本気なり 山中 葛子 107 6

横須賀洋子

風呂敷のマントで空を翔べたころ 鈴木 一行 104 2
 ふわりふわりたしかに元日を歩く 高桑 弘夫 104 3
 パンドラの空き箱浮かぶ春の海 白木 暢子 105 9
 人間のかたち崩れて月の舟 徳吉 洋 105 9
 まだ昼が遠くに見える昼寝覚 普川 洋 106 2
 アネモネと四五回言へば眠れさう やち 坊主 106 3
 お彼岸のみんな外れる第六感 羽村美和子 106 4
 願いごと多くて汗のお賽銭 藤田 守啓 107 4
 コツコツと革の匂いの女医が来る 松澤 龍一 107 6
 戦争を語るしわしわ麻の服 近藤 榮子 107 7

風呂敷のマントで空を翔べたころ

鈴木 一行
 紙芝居のおじさんの最後に登場する名調子
 「黄金バット」男の子も女の子も固唾をのんで
 見た時代。家に一枚はあつた唐草模様の風呂敷、
 さつと肩に羽織りハタキを持てば、もう正義の
 味方に変身。何人もの黄金バットの出現となる。
 ふわりふわり鳥のように走る彼等はまさにヒーロー。
 無季のような、有季のような揚句のマント。
 しかし、ひたすら懐かしい句。

長井 寛

陽を載せて動き出したる薄水 清水 重陽 104 2
 ぶらんこのゆづればはぐれたる如し 田口満代子 104 3
 残生をさくらさくらとしめくくる 長浜 聰子 105 8
 水中花無理なき嘘を通しけり 寺田美津江 105 9

人間のかたち崩れて月の舟 徳吉 洋 105 9
 この誤読は新鮮言の葉の樹海 普川 洋 106 2
 大夏野いたるところに草の罨 細根 栞 106 3
 紫陽花のやさしき色に溺れたる 鳴戸 奈菜 106 4
 崩れそう泣きそう笑いそうな雪 三須 民恵 107 4
 悪妻に時効などなしけむり茸 山中 葛子 107 6
 悪妻に時効などなしけむり茸 山中 葛子

この句の詠みどころは勿論「悪妻」、作者は
 自らを悪妻と称して憚らない。家庭の安寧を乞
 い願う妻の切実な告白の句である。とかく此の
 世は住みにくい。複雑極まりない現代の荒波を
 生き抜くには更なる艱難辛苦の道を歩まざるを
 得ない。妻には時効などあるはずもない。男性
 たる者は座五の「けむり茸」を読み解くことが
 肝心だ。

西澤 繁子

力強き磁石の箸や夏の暮 柳本 ゆみ 106 2
 啼くほどに郭公過疎を欺けり 保坂 末子 106 2
 甚平を脱いで喪服の重さかな やち 坊主 106 3
 啄むように芝の草取る男たち 馬場 益江 106 4
 箱庭にわたくしがおり杖ついて 鳴戸 奈菜 106 4
 伊八の波しづくとならばほうたるに みちのくたろう 107 4
 衣被ぎ路地に真砂女の割烹着 山中 頼子 107 6
 悪妻に時効などなしけむり茸 山中 葛子 107 6
 大花野真中に父を座らせる 山端かすみ 107 6
 ぐんぐんと土手の夕日に還る母 松澤 龍一 107 6

富澤さち子

灯の届くかざりが大地蕪汁 塩野谷 仁 104 2
 流木の闇みちのくの祭笛 重田 忠雄 104 2
 かげろいて群像の裾短くす 杉山真佐子 104 3

必然を生きてはるはるのぼる鮭 鈴木 郁子 104 4
 ふうこそを漕いで暖流へ乗り移る 木之下みゆき 104 4
 小鳥来る地球儀回す子の窓に 菅ノ谷文子 104 4
 顛末の突きあたりたる十三夜 村上千代美 107 4
 夏・特別な日のフルスイング 藤田 富江 107 4
 ながれ来てまた風になる赤とんぼ 山田 邦彦 107 6
 夏の雲地球に水をこぼしけり 山崎 文子 107 6

森村 文子

灯の届くかざりが大地蕪汁 塩野谷 仁 104 2
 行列もおぼろのもの一つなり 曾根 毅 104 2
 ふわりふわりたしかに元日を歩く 高桑 弘夫 104 3
 黄昏の形状記憶曼珠沙華 林 阿愚林 105 8
 静かなる闘志夏木として立てり 星野 一恵 106 2
 アネモネと四五回言へば眠れさう やち 坊主 106 3
 夏蝶に振り向かれたる娘たち 鳴戸 奈菜 106 4
 天折の数ほどあかい蛇いちご 門谷 杜人 107 5
 熱帯夜鏡に海の深さかな 渡辺 澄 107 5
 冬の月人形町を通るとき 山崎 聰 107 6

希田沙知子

遠流のご舟にからまる魂や藻や 武田 伸一 104 2
 流木の闇みちのくの祭笛 重田 忠雄 104 2
 ぶらんこのゆづればはぐれたる如し 田口満代子 104 3
 餅食べに海より帰るほとけたち 鈴木 和子 104 4
 庭中の水仙を摘み誕生日 西宮はるゑ 105 8
 障子貼る月の光を聞くために 畠 淑子 105 9
 旅の本探し当てたり新樹光 股野 久子 106 2
 花冷えや島に一つの掲示板 中村 棹舟 106 4
 山百合や原野に還る開墾地 久保さちを 106 5
 名月や狸と踊り明かそうか 山端かすみ 107 6

第二回ミニ吟行会

（きおろし）
（木下、川めぐり）

日時 平成二十五年七月二十一日(日)
会場 伊西市立中央公民館
司会 松澤 龍一



炎帝の気がちよつと弛んだのか、すがすがしいときさえ言える大暑前々日、伊西市木下にて、会長はじめ会員の皆さん二十三名（定員二十四名のうち一人当日欠席）が到来された。

当日のメインは地元NPOが立ちあげた企画で、手賀沼から利根川に落ちる三つの川をめぐり沼の一部まで素朴な屋形船で上る、という若山牧水も同じような舟遊をした水の旅である。果してどんな句材を皆さんに提供してくれるのか、地元の方は内心気をもんでいたが、豊かな水の流れ・真菰や蒲の緑・青鷺・川鶴・かいつぶり・大きな鱧魚の跳躍、そして白鳥たち（中でも家族七羽の行進は演出効果抜群）などが皆さんを歓迎してくれた。

下船し昼食場所の老舗蕎麦屋までの途は利根川土手を通るコース。松尾芭蕉が『鹿島詣』で舟に乗ったとする布佐も、また、ここであら

うど大きくカーブする利根川のうねりも一望できるビューポイント。

昼食後、伊西市中央公民館での句会は、てきばきとスピーディーに進行される中にも、魅力的な俳語の言葉が数多飛び交った密なる時間。定刻にはピタッと終り、その後は木下駅前の沖縄料理店で喉を潤す。店を出、電車に乗られる皆さんをお送りする空には東にまあるい月、西に美しい夕焼、最後まで会長・会員の皆さんを歓待してくれた（？）わが町。帰路、祭囃子を遠く聞きながら改めて「俳句の力」というものを実感させてくれた今日の吟行会に参加できたことを深く感謝した。（島田翠松記）

参加者作品（二句のうち一句）

- | | |
|-------------------|--------|
| 川岸に東屋一つ浮いて来い | 青木 一夫 |
| 青鷺の狙い命中そばのれん | イザベル真央 |
| 印旛野や青鷺遠く見はるかし | 内田 庵茂 |
| 電柱を青蒿のぼる無頼かな | 大畑 等 |
| 木下のちびっこ相撲夏の宵 | 小高 稔 |
| ぶらり川川鶴の影の生きており | 希田沙知子 |
| 船からは船の名見えず半夏生 | 楠見 恵子 |
| 鬱の鶴は翼ひろげて飛びたたず | 小林 実 |
| 細波乱し半音階の夏 | 島田 翠松 |
| 船頭と笑う鯰と川廻り | 白木 暢子 |
| 風渡る川舟涼し牧水碑 | 鈴木 瑩子 |
| ミニ旅のえにし涼しき水の郷 | 高木 一恵 |
| 夏のかいつぶり我も川面を駆けるなり | 高橋 宗史 |
| 草いきれへささきの風に乗ってくる | 立花 洸 |



- | | |
|----------------|-------|
| 生臭き風を斂めて水草生う | 栃木 きよ |
| 夏白鳥にあり余るほどの水と空 | 長浜 聰子 |
| 青さぎの孤独に杭の傾きて | 野口 京子 |
| 夏鳥である白鳥の家長たり | 檜垣 梧樓 |
| 炎天の白鳥広く川の中 | 保坂 末子 |
| 川の中いつきに広げ葦茂る | 星野 一恵 |
| いんさいの空へ鱧魚の跳び晩夏 | 松澤 龍一 |
| 川鶴らの項を伸べて杭の上 | 山崎 幸子 |
| 六幸川と名付けたるに落とし水 | 渡辺 澄 |

津田沼研究句会報告

(於：津田沼一丁目町会会館)

●第二五二回 (平成二十五年四月九日)

司会 檜垣 梧樓

三本の指でつまみて春拾う
陽炎や福助足袋が捨ててある
葉も出して徹底的に山ざくら
ひきがえるお前が列島ゆらすのか
轉れるそのまた上も轉れる
ぶらんこに乗つてみるらら揺れてみる
ちしゃと云う祖母なつかしむ種を時く
四月馬鹿猫にききたいことがあ
膝深く抱けないことも春の夢
花満開たったひとりで坂口安居
暗くなるまで待てぬ螢鳥賊の閃光
二度とない青春バラよもつと赤く
何某のつれあいですと花の客
花万朶弓手に魚肉ソーセージ
お使いはいつも自転車花の屋
城をめぐる戦せしこと花疲れ
花祭り「はい」の返事のきつぱりと
母さんの後から流る花筏
春愁や何処かに時を刻みあて

大塚 弘毅
大畑 等
山中 葛子
岡田 淑子
檜垣 梧樓
後藤 章
なかもと 淑子
大村 錦子
横須賀洋子
小林 実
林 阿愚林
吉野 精
佐藤 晏行
楠見 恵子
希田沙知子
村上 澄子
白木 暢子
金子 未完
股野 久子

虚子の忌の曇り硝子の外廁
跡取りが叱られてゐる田植えかな
ふたりぶん影絵のような海雲買う
低姿勢夏まき通し蛇苳
履物は夏めく小町通りかな
居るはずのない人がゐる春深し
花空木バスの明かりの遠ざかり
結構な世かもけるける蛙麻呂
カーネーションのひと色怖い老母かな
ペカ舟は熟女をのせて春重い

大畑 等
檜垣 梧樓
山中 葛子
金子 未完
後藤 章
楠見 恵子
股野 久子
佐藤 晏行
横須賀洋子
吉野 精

●第二五二回 (平成二十五年五月十四日)

司会 大村 錦子

大畑 等
檜垣 梧樓
山中 葛子
金子 未完
後藤 章
楠見 恵子
股野 久子
佐藤 晏行
横須賀洋子
吉野 精

青葉研究句会報告

(於：千葉市市民会館・第五会議室)

●第二十二回 (平成二十五年四月二十五日)

司会 小高 稔

風薫るギヤング映画に酔い痴れて
大いちょう若葉バクハツ昨日から
青葉冷え壁に画鋲のあと増やす
スカンポや切り立つ崖は遠ざかる
鳥賊墨のバスタ子供の日の大人
おぼろ月二十三年戻り道
木下闇お一人様を尿迎へに
木戸銭は弁天様に春惜しむ
有耶無耶でよしと目があう鯉幟

希田沙知子
なかもと 淑子
岡田 淑子
大塚 弘毅
小林 実
白木 暢子
林 阿愚林
村上 澄子
大村 錦子

風車夕日の赤を回しきる
花筏行けるとこまで行つてみる
桜ふぶき人面土器の眼が動き
しゃぼん玉時空を超えてむむむ無
蛇穴を出てしなやかに生き直す
春眠は覚める約束熟寝する
我がちに覗く古井戸麦の秋
藤咲いて人がこぼるる太鼓橋
草臥れし季寄せのとびら初桜
花吹雪先頭を行く乞児人
茎立ちの髻が立っている旅疲れ
余花明り生涯動かぬ黒い貨車
かげろうの女くの一かも知れぬ
春風や纏わり付くもの纏うもの
うららかや通り賑はず杖の音

芝崎 梓
馬淵 津枝
並木 邑人
小高 稔
椿 良松
山崎 幸子
長谷川千枝子
加藤 法子
矢野 忠男
鈴木 陽子
長浜 聰子
石井紀美子
細根 栞
細野 一敏
大塚 弘毅

●第二十三回 (平成二十五年五月二十三日)

司会 長浜 聰子

新緑となりきるまでの葉の動悸
人の和につつこんで来し熊蜂
誰からも触れてもらえず水中花

椿 良松
鈴木 陽子
馬淵 津枝

柏研究句会報告

(於：柏市「ハックルベリー」2階)

●第十二回 (平成二十五年五月十一日)

司会 岡田 春人

抱卵の構えを見せて羽抜鵜
噴水の形状記憶ありにけり
さよならの言葉の後を継ぐ老鷺
これよりは荒野と思え蝶の羽化
神域の万緑抜けて人臭く
万緑の天空石段の梯子
色色色躑躅にもあるジレンマ
青虫に触れし掌洗ひ洗ひても
文明の呼び込む病ひ仏法僧
狛犬の阿吽五月の婚の列
深閑と教育学部柳の芽
石垣に見馴れぬ絵柄蛇の衣
喧嘩独楽サツと廻つて昭和の日

加藤 法子
山崎 幸子
保坂ミエ子
並木 邑人
芝崎 梓
石井紀美子
細野 一敏
長谷川千枝子
大塚 弘毅
細根 栞
長浜 聰子
小高 稔
矢野 忠男

蛇一匹つむりの渦を見に来たり
春愁やペットシヨップの広い窓
しあわせの擬態のままのへび苳
たんふを冷やす香水ミステイアール
書記官鳥仮想風車へ草矢うつ
すれ違ふ少年蛇のにほひかな

大畑 等
栃木 きよ
下村 洋子
イザベル真央
長井 寛
岡田 春人

金縛り醒めし余白に夏の月
子規庵と同じ朝顔ふたば出る
深淵の目高の腸に透く有情
残簡や古人の声涼し
青無花果母は児の目に晒される
父の日の鳥賊墨スパゲティの鈍
禿山や吾が祖百済の音楽土
石仏の悟りさまさま遠雷す
青大将住所千代田区一丁目

小林 俊子
イザベル真央
長井 寛
下村 洋子
大畑 等
松澤 龍一
野口 京子
岡田 春人

《會員・会友の近況》

- ・目が大分悪くなりましたが俳句は楽しみにしております。(小高 和子)
- ・猛暑で体調も狂いつつも本日は暑氣払いの吟行で少々うんざり、俳句の鬼ばかりで楽しんできました。(菊地 京子)
- ・尺八のコンサートに向けて練習をしていたら鶯が間合いをとりながら鳴き続けてくれました。鶯と尺八の掛け合いをしばらく楽しみました。(小野 裕文)
- ・素直に伝える難しさを痛感しています。(小高 稔)
- ・落ち着いての句作が出来ない毎日でしたが古希を迎え、俳句と向き合っていきたいと思っております。(岡山 敦子)
- ・結社「白」の句会に月二回出席し頭の訓練に努めています。現在八十一歳ですがゴルフも時々楽しんで健康に気をつけています。(國分 三徳)
- ・久しぶりに養老川へ鮎釣りへ。来年で九十です。車を運転して来たの？ はい四十分程です。(佐藤 信顕)
- ・市原より千葉市に移って三年近く、やっと地上百米の生活にも馴染めるようになりました。世界遺産となった富士山は朝もですが、殊に夕景が美しく、今年こそダイヤモンド富士が見られますよう希っています。(小高 桂子)
- ・三年前に胃癌で胃を三分の二削除し昨年は腸からの出血で二十日間入院し現在は元気です。(佐々木 禎)
- ・なるべく老人の俳句は、つくりたくないのですが、何故か、こうなってしまう。昔のように若々しい俳句作りたいです。(小林 雪枝)
- ・後期高齢者になり自分なりに俳句を楽しんでいきます。この頃ようやく季語が二つ重らなくまりました。(川又 優)
- ・老体乍ら今暫くやる心算で居ります。(佐久間眞城)
- ・先日、木更津市の体力測定に行き、握力、開眼片足立ち等々で一時間程汗を流して来ました。自分の思い通りには体が動いてくれず改めて年を知らされることになりました。(原 悦子)

・異常気象、猛暑に苦しめられますが、俳句を読み書くことでこの季節をあじわい乗り切りたいと思っております。(佐藤 鈴子)

掲示板

《會員・会友異動》

- 逝去 (會員) 佐藤茂三郎、澤井益一郎、菅谷泰夫
- 入会 (會員) 神尾浄水、棗 楯伊、林 ゆみ、増田忠彦、薄井智介、岡田美美子、川上典子、坂本正夫、首藤こころ、松澤伸佳、馬淵津枝 (会友) 大地節子、和田 勉 (會員) 甲州千草、酒井美知子、鈴木翠嵐、大野黎子
- 移転 太田まさ子 (千葉市緑区中西町へ)、池田和人 (千葉市緑区誉田町へ)
- 退会
- 移転
- 平成二十五年第二回幹事会
- 日時 平成二十五年五月二十一日(火) 午後六時より
- 場所 船橋市勤労市民センター
- 出席者 大畑、秋尾、渡辺、並木、檜垣、内田、高木、高橋(宗)、野口、吉野、長浜、上野、大塚、小高、木之下、小林(俊)、小林(美)、小張、清水、下村、白木、高橋(健)、林、星野、細野、森村、三須、矢野、山崎
- 欠席者 松澤、久野 (敬省略、順不同)
- 議題
 - 一、平成二十五年定期総会・俳句大会の結果と収支報告について
 - 二、春の吟行会の結果と収支報告について
 - 三、平成二十五年秋の吟行会計画について (日時、候補地)
 - 四、ミニ吟行句会(印西)について
 - 五、第一〇九号会報について
 - 六、現代俳句協会(本部)の動向について

- 七、第二十回関東甲信越・静ブロック連絡会議について
- 八、各研究句会の状況について
- 九、平成二十六年俳句大会 大会係、選者諸君について
- 十、その他
 - ① 會員・会友の入退会状況について
 - ② 次回幹事会
 - ③ その他

□ 事務局・編集部だより □

● 十月二十日(日)に恒例の秋の吟行会が行われます。今回は千葉市の加曾利貝塚が吟行の舞台です。皆さん、奮ってご参加ください。句作と併せて縄文の暮らしに想いを巡らせませんか。

● 平成二十六年三月十六日(日)に、定期総会・俳句大会を開催します。早くも俳句大会の作品募集が始まります。会員以外の方、他地区会員も参加できます。お誘い合わせの上、ご応募をお願いします。

現代俳句千葉 第一一〇号
平成二十五年八月三十一日発行

発行人 千葉県現代俳句協会
会長 大畑 等

現代俳句千葉編集部
〒278-0037 野田市野田六六五番地 松澤 龍一

千葉県現代俳句協会事務局
〒270-1471 船橋市小室町二八〇四 高木 一恵

電話〇四七-四四七-二九一二
FAX〇四七-四四七-二九七二